

現代家庭における 文化継承機能の衰退

楡木 満生

家庭にはいろいろな機能がある。例えば、外出から帰ってくると気持ちがあつとするのは、精神安定機能が家庭にあるからである。しかし、家庭にはそれよりもっと重要な機能がある。つまり、生まれた子ども達を文明社会の中で一人前に生活できる人間に仕立て私達の価値観や道徳観を次世代に伝えていくという文化継承機能は、より重大である。子どもは、意識的、無意識的に親の生活様式を真似して身の周りにある用具の使い方を知り、言葉の使い方覚えてきた。よい悪いは別にして子どもは、いつの間にか家庭における親の価値観や行動様式をコピーして一人前の大人に成長して来たのである。

現代社会の多くの人達がこの家庭における文化継承機能がおかしくなり出していると感じ始めているのではないだろうか。例えば、地べたに平気で腰を降ろしている男女や、援助交際を平気で求めていく女子生徒、さらには繁華街で夜通し騒いでいる若者などを見ていると、どうしてこのような現象が出て

きたのだろうかと首をかしげる人も多いのではないか。このような現象は、もちろん単純な因果論で結論づけられるものではなく、種々の要素が複雑に積み重なってきているものであろう。例えば海外文化の影響であるとか、マスコミの取り上げかたに問題があるとか、教育カリキュラムの内容に問題があるとかいわれていたりする。

幼児教育関係者には予見された

今日の社会変化

しかし、これらの若者の問題を担当している中学高校の教育関係者に言わせるとこれらの現象の発端はそれ以前の小学校や幼稚園や保育所時代に原因をさかのぼることができると言っている。そして長い間幼児教育に携わってきた関係者に聞いてみると、幼児の家庭環境が昔と今ではまったく違ってしまっただけが分かる。幼児教育に関係している人達に

とっては、幼児の生育環境が時代と共に大きく様変わりしており、「やはり予想していたことが起きていく」という感じを抱かざるを得ないのが実情であろう。これらの現象の萌芽である家庭崩壊は、すでに現在の若ものの幼児期の教育の中に見られたのである。やはり幼児期の子育ての手抜きが、青年期になって社会現象として心配していた通りの現実になって来たのである。いまの若者達の今までの親子関係では常識と思われたいろいろな考えを否定するような事例が起きるようになったのはそう古いことではない。

幼児期における諸事例

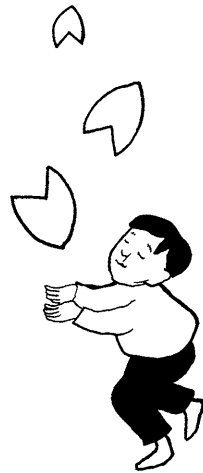
わが子を愛せない事例

ある三十四歳の母親が四歳児の長男の子育てについて次のように相談してきた。

「母親がわが子が可愛いと思うのは当然と言われて

いますが、本当にそうなんでしょうか。私には長男のやることなすことが不満の種で、可愛いとはとても思えません。どうもわが子と接しているとすぐに叩きたくなり、どなりつけたくなります。それを抑えて接しているだけで、消耗してしまいつくてしょうがないのです」

子どもと接するだけで毎日疲れがたまり、つい、夫が家に帰ってくるまでに何度かたいてしまう状況が続いていたとのことである。聞けば、それまで一流会社でOL時代を過ごし、結婚し子どもが生まれてからも二歳までは義母に子どもをあずけて勤務を続けていたとのことであった。それが、半年前に義母が病気になる、勤めをやめて家で長男と向き合って生活するようになってから、ふさがちになり長男のやることなすこと気になり始めた。わが子のやることなすことは（会社の同僚や部下に比較し



て)まどろっこしくて見ていられない。ついこうやるんだとどなりつけてしまうとのことであった。

この母親には、もっとか弱い存在であった乳児期のわが子の姿を見ていないところが問題だった。母親の意識は、会社に勤務している時のイメージが常に付きまとい、家事も育児も短時間能率主義で済ませている様子が見て取れた。子育てとは、促成栽培のようにはいかない。毎日が同じ物事の繰り返しと思える時間の流れの中で子どもと向き合っていて子どもの意識のペースに合わせて時間を使い、気がついて

見たら子どもがいつの間にか成長していたというように過ぎるものである。この事例でも母親が子どもに合わせるペースをつくるのに半年間のカウンセリングが必要であった。

子どもの方から親を選んだ事例

別な母親から次のような事例を受けたことがある。

「うちの子どもは近ごろどうしても家に帰ってきてくれないんです。この子の祖母の家が幼稚園の近くにありますので、祖母に幼稚園の迎えを頼んでおいたのですが、幼稚園から帰って、近くの公園でいるからそれでいいと思っていたのですが……そうしたら祖母の家の子どもになるっていったきり家に帰ると言わないんです」

常に芸術家の父親が家で創作活動をしていて少し騒ぐと怒られるが、祖母の家では子どもが遊ぶのは

自由にさせていたために家に帰りたくないと言いつつめたらしい。子どもの意見を聞いてみると「お母さんもお父さんも家ではけんかばかりしているの。でもこちらの家では皆にこにこしているからこっちの家の子どもになりたい」ということであった。

カウンセラーが「いつも周りの人がにこにこしていてそれであなたはうまく成長出来ると思うの？」と聞くと「でもこわいお父さんやお母さんの家で大人になるよりましでしょう」という答が帰ってきた。二か月かけておじいちゃんとおばあちゃんに協力してもらい子どもを家に戻したが、子どもの方が自分の成長についての見識をもっているのではないかと思わせられる事例であった。

「僕、生きていたくないの」

子どもとは生きる衝動を強くもっていて、死に対する感情表出を行うことはまずありえないと長い間

教育関係者には信じられてきた。しかしながら、今日では子どもでも死の衝動もあるし、自殺もありえろと考えられるようになってきている。

ある母親から五歳の男の子の食欲がないのでどうしたらいいかと相談があった。確かに子どもは痩せていて見るからに元気がなさそうであった。初めは身体の病気かと思われたが、各種の検査でも特に異常がなく、気持ちの問題ではないかと相談を受けたのである。子どもと遊戯療法を行いなから一緒に話をして見るとあるとき、ふと「僕、生きていたくないの」という言葉がでてきた。なぜそんな言葉が出てきたのか、じっくり時間をかけて聞いてみると父親が家を出て行って以来、この子にとっては、母親が夕方から働きに出るようになって家で一人で夕食を食べ、後片付けをしてテレビを見ていることが日課になった。母親の仕事について子どもなりに理解し、「僕がいけない方が働きやすいの」と言ってい

た。カウンセラーが「そんなことはないよ。君が早く大きくなってお母さんを楽させてあげようよ」というと、「そんなこと出来るはずないよ」

といい、「僕は大人まで生きられないもん」という言葉が返ってきた。「君はどこも身体は悪くないのだから生きられるよ」というと、「だってお母さんに迷惑をかけるなら、早く死んだ方がいいんだもん」という言葉が返ってきた。結局この子の生き甲斐は母親の再婚相手が理解してくれることによって達成された。

減少してきた幼児期の親子接触

——子育ては一生の一大事

根気と時間がかかる子育て



幼児期の子育ては手のかかることであり、母親やその他保護する人達が一生懸命に幼児に向き合って育てることによってようやく一人前に育つのである。人間は「人の間」に育ってこそ人となりえるのである。

そうでないと野生児のようになってしまうことはよく知られている。他の動物と違って人間が知恵を獲得していくのは、自然に言葉や生活習慣を覚えるのではなく、幼児時代に意図的に言葉を話して聞かせ、幼児に分かる言葉で生活習慣を教える人がいたからこそ、文化の継承が続いてきたのである。子どもを育てることが片手間の仕事で済まないことは長い人類の歴史が示しているはずである。

子育ての特徴は、成長時間という限られた時間制約の中で、タイミング良く子どもの成長に合わせて必要な知識や技能や態度を教えていかなければならない。少し幼児教育用具が改良され子育てが楽になったからといって子育てが困難で根気のいる複雑

な作業であることは、現在でも変わらない。子どもの発達にあわせて幼児に分かる言葉を用い、幼児と同じ目の高さで物事を見つめ、幼児の考えていることを理解し、人間世界の言葉に直して解釈できる大人がっていないなければ子育ては成立しない。子どもがテレビの前で静かに見ているからといって、自分と同じ文化をもった大人に成長してくるとは限らないのである。子育てとは同じことを繰り返し、根気よく何度でもやってみせて教えこむ一大事業である。

母親に安心して子育てが出来る環境を

このように大切な子育てが、結果がすぐに目に見えて来ないがために軽視され、後回しにされて来たのである。目の前の目立つ事象に気をとられて、次世代の文化の継承という長期観点が後回しにされたのである。その結果が今日の社会現象であろう。

子育てが敬遠され、少子化時代となり、日本中の子どもが減少して活力を失いつつある時代を迎えている。

一口に母親といっても、子育ての環境はさまざまである。子どもに十分な時間を接することができない母親もいるし、子どもの思考過程についていくのが苦手の母親もいる。

子育ては試行錯誤の連続であり、やって会得しなければならぬ部分がある。だから、「子どものうちから、自立心を育てようと離して育てました」という母親がいる反面、「十分な愛情が必要だと思って、密着して育てました」という母親もいる。どの程度離して育てたのか、どの程度密着して育てたのか客観的な尺度がないままに私達は子育てをいつの間に進めてきていたのである。しかし、現在の母親に必要なのはゆとりであり、試行錯誤の許される時間である。そして、絶え間なく激しく変化していく

社会にあって、子育てを担当している人達がゆとりをもてる立場においてやらないと、文化の継承をしない若者達が出来てしまうことに気付かなければならない。ここでは今まで母親を中心に文化の継承を論じてきたが、これは幼児教育や児童教育を担当している幼稚園、保育所の先生方や小学校の先生方についても同様である。もっと文化を継承していく段階における母親や教育者の役割を大切にしていかなければならない。

今の社会のさまざまな現象を見ると、幼児期に子ども達が十分に基礎的価値観を身につけるべき段階に手抜きされ、文化の継承がとぎれてしまったことを感じるのである。私達はもう一度、初心に戻って幼児時代の発達段階の教科書を読み直すべきである。

(お茶の水女子大学)